令和６年度　学校自己評価システムシート（県立川口北高等学校）

目指す学校像	文武両道の精神のもと、高い志と品格を備えた未来を拓くグローバルリーダーを育成する学校

重点目標	１　自ら勉学に真摯に取り組む姿勢により学力の向上を図る。 ２　満足度の高い生徒全員の進路希望の実現を図る。 ３　文武両道の校風を堅持し、学業及び体力、精神力の充実を図る。 ４　グローバル社会に対応し、国際社会に目を向けた教育を推進する。

達成度	A	ほぼ達成（８割以上）
	B	概ね達成（６割以上）
	C	変化の兆し（４割以上）
	D	不十分（４割未満）

※学校関係者評価実施日とは、
最終回の学校評価懇話会を
開催し、学校自己評価を踏まえて
評価を受けた日とする。

※コロナ感染防止対策で紙面開催

出席者	学校関係者	４	名
	生徒	３	名
	事務局（教職員）	７	名

※　重点目標は３つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目（年度達成目標を意味する。）は複数設定可。
※　番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学校自己評価								学校関係者評価
年度目標					年度評価（２月１２日　現在）			実施日　令和７年２月１２日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等
1	【現状】 アクティブラーニングを土台に、「ＤＸ化推進」、「教科横断」「文理融合」の視点を取り入れた学力向上を実現するため、授業改善に取り組んでいる。現在、全学年の生徒がタブレット端末（ｉＰａｄ）を活用し、探究授業の研究、教科横断型授業の研究に積極的に取り組み、少しずつ成果を上げてきている。 【課題】 全学年ｉＰａｄを授業やその他の教育活動で活用できる状態になったので、今後教員間で情報共有を進め、さらなる授業改善を進めていくことが課題である。生徒の学力向上にどのように役立てていくのかを引き続き効果検証するとともに、ＤＸ化推進とアクティブラーニングを融合した授業、教科横断型授業、文理融合型授業などの「新しい学び」を研究・実践する。 また、観点別評価の実践、特に「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、主体的・能動的な学びを促す取り組みを進め、研究を継続する。	○「学力向上を実現するための授業改善」に関する取り組み ○教員と生徒のＩＣＴ活用環境の充実。 ○観点別評価の工夫・改善を育成する。	①「新しい学びを創る会」の実施、様々な情報の共有 ②教員がＩＣＴ機器を活用して、授業や情報伝達、各種調査等を行う。生徒が紙と鉛筆だけの授業からＩＣＴを活用した授業をストレスなく受けられたか確認する。 ③観点別評価「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法の研究	①授業改善に関する組織的かつ実践的研究を行えたか ②授業等で活用できるように使用方法を伝えられたか。生徒が正しくＩＣＴ機器を授業に役立てられたか。 ③観点別評価、特に「主体的に学習に取り組む態度」について適切に滞りなく行えたか。	①ＩＣＴを活用した授業は当たり前となり、文理融合や教科横断の視点を授業の取組が見られた。 ②昨年同様、各教員は、ＩＣＴ機器を積極的に使って授業を行っていた。 ③「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関して、教育課程委員会で「観点別評価」が始まって３年間のことを各教科から振り返り検証した。	A	・ｉＰａｄ、電子黒板を使用して、より一層のＩＣＴ活用の研究を重ねる。 ・教員がどのようにＩＣＴ機器を使っているかをお互いに示し合う機会を増やしていく。 ・三観点評価と評定についての成績処理の円滑化と、「主体的に学習に取り組む態度」の評価について共通認識を一層深めていく。	・ＩＣＴ機器の活用については、かなり取り組んでいると評価できる。これからの時代、かなり重要な部分なので、引き続き研究を進めていってほしい。 ・観点別評価、特に「主体的に学習に取り組む態度」については、よくできている。今後は初任者や他校から異動してきた先生に、研修を行うなどして、差が出ないように取り組んでほしい。
2	【現状】 昨年度は国公立大学合格者数が３９名と、令和４年度と比較して実績は伸びなかったが、高い志を持ち、国公立大学を目指す生徒も依然として多くいる。 【課題】 主体的な学習者を育成することが急務である。そのためには生徒が自ら学習計画を立て、実行・修正を繰り返す必要がある。学習状況を測るテストや本校独自の学習状況調査を実施しているが、分析や連携がさらに必要である。また、生徒の進路決定に、より保護者が関わる時代において、進路講演会や教育視察を、保護者のニーズに応える内容にしていく必要がある。	○主体的な学習者を育てる。 ○生徒の学習意欲を向上させる。 ○学習状況調査、授業評価、外部測定ツールを分析・連携する。 ○進路に関するPTA主催行事の充実	①定期考査前や長期休業中の学習計画・振り返りの働きかけ ②進路行事の修正・充実。自学自習オリエンテーションの工夫・改善 ③本校学習状況調査、授業評価、外部測定ツールの連携とデータ分析・活用 ④進路講演会の実施に際し、保護者の関心の高い事柄について実施。また、保護者の要望に合わせた教育視察を実施する。	①定期考査前や長期休業の学習計画作成の働きかけの回数 ②意欲向上のための進路行事・集会の回数。自学自習オリエンテーションの改善内容。 ③本校学習状況調査、授業評価、外部測定ツールの連携と活用状況 ④進路に関するＰＴＡ関係行事が実施できたか。進路に関するＰＴＡ関係行事に対する満足を与えることができたか。	①学習計画の作成に関しては、定期考査ごとに働きかけたが、実施できないこともあった。 ②生徒の実態に合わせた進路行事を実施して、学年集会等で学習意欲向上を図る講演を行うことができた。自学自習オリエンテーションⅠは時間内に効果的に予習、授業、復習方法を生徒に示すことができた。Ⅱ、Ⅲに関しては学年任せにするのではなく、学校行事として確立することが確認できた。 ③授業評価に関しては管理職や教務部と協力して１１月に実施した。「スタディサポート」の結果から基礎学力が身についていない生徒の把握や「学び未来PASS」の結果から生徒の行動特性を把握した上での学習指導、学級・学年経営ができた。 ④教育視察（千葉大学、法政大学）への参加者は 35 名であった。本校進路指導主任も同行し、情報提供ができた。本校卒業生による案内が大変好評であり、参加者の満足度は高かった。	A	・学習習慣と学習方法の確立に向け、具体的な方策が引き続き必要である。 ・教育視察は、実施形態について改めて検討し、より現実的で保護者の要望に合わせた企画としていく。	・受験生が進路のことを相談する相手の１位が、塾・予備校の先生であるとのことだが、塾・予備校に勝る、公立高校ならではの利点を生かした進路指導を期待している。 ・教育視察について、保護者が要望するものを把握し、より理解していただける形で進めてほしい。 ・現１年生からはじまる、文理融合系については、その利点を十分に生かした指導を期待する。
3	【現状】 文武両道の精神のもと、真摯な態度で学習や部活動、学校行事など全てのことに全力で臨ませることを継続的に指導している。 【課題】 保護者を含めてコロナ流行前のように学校での生活を基本にした指導を強化する必要がある。自分自身の健康に関心を持ち、かつ心身の健康を維持しながら学習や部活動等に取り組むことができるような自己管理能力を持った生徒の育成が課題である。 生徒会活動は自主自立という観点から高い水準にあり充実しており、引き続き自ら考え行動する力を高める活動をさせたい。	○積極的な生徒指導の推進。 ○安全指導の徹底。 ○自主的な生徒会活動の育成と推進。 ○近隣住民や中学校との交流の促進。	①朝の立哨指導と８時15分登校の励行、授業時のチャイム着席の励行。新制服の着こなしをきちんとしているか。 ②雨天時自転車傘さし運転防止、かっぱ着用指導。交通安全教室の実施。 ③生徒会本部役員の自立的な活動。積極的な行事の運営。 ④学校評価懇話会やＰＴＡとの意見交換における発言内容の準備。近隣住民や中学校、他校との交流会の実施。	①各学年の朝の遅刻指導を受けた生徒数が前年度より減少したか。全学年の年間遅刻総数が 500 回以内か。着こなし指導を受けた生徒数がどれだけいるか。 ②傘さし運転等で指導された生徒数。交通事故の件数と内容。交通マナー等に関する近隣からの苦情数と内容 ③定例会での発言の質。「北高祭」の実施状況。 ④学校評価懇話会での発言。近隣住民や中学校との交流会の内容。	①１年７人、２年１０人、３年７人　合計２４人（昨年２７人） １年３２２回(昨年１１０回)　２年６１３回（昨年１９０回）３年８３４回（昨年３０９回）　合計１７６９回（昨年６０９回） 頭髪１名、スカート丈については数人 ②全学年０人。登下校での交通事故７件、自転車等のマナーについての苦情数件あり。 ③考えを持って発言できている。他者に働きかける発言も増えている。北高祭は飲食に関するガイドラインに則り、実施することができた。 ④立場を理解し真摯に発言を行っていた。吹奏楽部や音楽部、生徒会で、老人ホーム、水道局、協同病院、中学校などを訪問して交流を行った。	B	・遅刻数は大幅に増加。通院や体調不良も含まれるため、増加となったと思われる。欠席者数も気になる。次年度は、遅刻、欠席しないで学校に来ることに対する家庭での理解を得る必要がある ・登校マナーへの苦情は減ったが無くならず、駅からの通学路の徹底と自転車乗車マナーの向上が必要不可欠である。	・コロナ以降、安易に欠席・遅刻する傾向がみられるが、基本学校は登校するものであるという点を、保護者含め、改めて理解してもらうよう努めてほしい。 ・特に３年生の受験期の欠席理由について、受験勉強のために学校を休む生徒が増えているとのことだが、その点について粘り強く指導していってほしい。
4	【現状】 グローバル人材の育成を目指すと共に、総合的な探究の時間を有効に活用し、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成している。 【課題】 自らの考えを、積極的に発言する生徒を育成することが課題である。そのためには英語の能力だけでなく、日本語話者以外と話す機会を増やし、積極的にコミュニケ―ションを取ろうとする姿勢も必要となる。また、世界的な視野を持つことも必要である。	○国際理解教育の推進 ○主体的・能動的なコミュニケーション能力の高い生徒の育成 ○世界に目を向けた生徒の育成	①国際交流を推進するため、フランクストン校と交流。 ②自ら考え、積極的に発信することができる生徒を育成するため、探究学習を中心に、すべての学校での活動を通して、生徒のコミュニケーション能力を高める。 ③ＳＤＧｓなどをテーマとした探究活動。教養講演会の実施。	①フランクストン校との交流を実施し、海外に臆せず発信する力を身に着けることができるようになったか。 ②生徒が積極的に発信する機会が増えたか。 ③総合的な探究の時間、教養講演会を活用し、世界に目を向けた生徒を育成できたか。	①交換ホームステイの派遣が実施された。参加者は発信することの重要性を覚え、授業その他の場面でも積極的に発言できるようになった。 ②探究活動を推進し、自ら学ぶ川北独自の学習スタイルを追求することができた。 ③総探の授業での全学年縦割りゼミ方式は概ね順調に機能しており、自国のテーマだけでなく、他国との協調を考えたグローバルな視点で、学習活動に臨むことができた。	A	・来年度の交換ホームステイは受入となる。企画運営から当日まで充実を図っていく。	・川口北ロータリークラブの交換留学制度を含め、より一般の生徒も関わる機会を増やしてほしい。 ・探究活動について、教員が与えるのではなく、生徒が自ら課題を見つけ探究する、学年縦割り形式は、高く評価できる。